
マテリアルウェポン

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアルウェポン

【Zコード】

Z4303Y

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

魔族によって壊されていく世界。

人類は生き残ろうと戦つたり、身を潜めたりして暮らしていた。

杉村 和也は身を潜めて暮らしていた。

だがある日魔族に見つかり、和也はとある遺跡に逃げ込んだ。その遺跡で見つけたキューブが和也の進む道を変える。

キューク

「ハアハア」

俺は今、逃げていた。

この世界は魔族によつて壊されていっていた。

今その魔族に追われている。

俺の居る場所は何処かの遺跡の様だ。

ここが何処の遺跡かはわからない。

だけど逃げるしかない。

俺はただの一般人だから戦えないし、武器えない。

俺はともかく逃げた。

今追つてくるかわからぬ。

だけど逃げるしかない。

捕まつたら最後、何されるかわからない。

俺は走った。

走り続けた。

「ハアハア・・・うわ！」

俺は石に躓き転げた。

俺はすぐさま立ち上がりうとしたが立てなかつた。

足がもう限界だつた。

俺は諦めかけた。

この世に神も仏もない。

俺はそう思った。

ふと、気付いた。

自分の懐からお守りが飛び出していた。

俺はお守りを拾い見た。

お守りには“杉村 和也”と俺の名前が書いてあつた。

このお守りは母がくれた物だ。

母と父は魔族によつて殺された。

俺はそのお守りを懷にしまい、俺は何とか壁を支えに立ち上がった。

俺は壁で自分の体を支えながら歩いた。

ともかく逃げるのに一生懸命だった。

まだ死にたくない。

俺はそう思いながら歩いた。

すると、少し広い場所に出た。

俺はふらつきながら部屋の真ん中に行き、辺りを見渡した。
何も変わりはない壁。

ここまで来る壁とは何も変わりがない。

俺は目を前に移すとある物が目にに入った。

「キューーブ？」

俺はそう呟いてそれに近づいた。

普通の四角の物があつた。

でも石ではないようだ。

俺はそれをしばらく見ていた。

「・・・・・」

俺は勇気を振り絞つてそれに触れてみた。

それを掴んだ瞬間だつた。

『適合開始・・・』

そんな声が聞こえた。

俺はそれを・・・キューーブを放す事が出来なかつた。

『適合率・・・65%』

その数字が聞こえた途端だつた。

『適合率上昇・・・66・・・67・・・68・・・』

ドンドン数字が上がり始めた。

『シンクロ可能・・・シンクロ開始』

その途端だつた。

俺の頭に何かが流れ込んできた。

戦い方、使い方、魔法、色々流れ込んできた。

最後にそれの名前が流れ込んできた。

「私は古代に作られた武器・・・マテリアルウェポン・・・【想像

主】なり・・・」

俺はそう言ひと意識が遠くなつていいくのを感じた。

ダメだ！こんな所で倒れたら奴らに見つかる・・・。

俺は意識をつなぎ止めようとしたが、それも叶わず・・・その場に倒れ込んだ。

ドンドン意識が遠くなつていいく。

ここで死ぬわけにはいかない・・・。

生きて生きて・・・生き抜くんだ。

俺はそう思った後、気を失ってしまった。

キューイ（後書き）

どうも作者のナナフシです。

マテリアルウェポンを読んでいただきありがとうございます。
さてと、これからジャンジャン話を進めて行きたいのでよろしくお
願いします。

感想・アドバイスを待っています！

マテリアルウェポンの力

「ん……？」

俺は目を覚ました。

いや……このまま目が覚めない方がよかつたかもしれない。

魔族が広間の入り口に居るのだ。

「見つけたぜ……随分探させやがつて」

その魔族には獸の耳があつた。

獸系の魔族だ……。

俺は恐怖した。

もう自分の人生がこれで終わりなのだから。

その魔族の隣には狼の様な魔物・ウルフ・が居た。

武器さえあれば……何とかなるのに……。

俺は自分を……いや、この世界を憎んだ。

まあ憎んでも、もう死ぬから無駄なのだが……。

俺は諦めていた。

「抵抗をしない所を見ると諦めた様だな……なら、ウルフに食われろや」「！」

その魔族はそう言った。

俺はウルフに殺されるのか……。

どうせならあんたのその剣で一刺しにしてほしかった……。

俺が目を瞑ろうとした時だった。

「！！」

いきなり俺の頭に声が流れ込んできた。

『我が主よ……諦めてはダメです』

誰だ？俺に話し掛けるのは？主？何の事だ？

『私はあなたが手にしたキューブの者です』

キューブ？あれ、そう言えば見当たらないな。

俺は辺りを見ましていた。

『私は古代の人間が作り出した武器……マテリアルウェポンです』
マテリアルウェポン？ そう言えば最後に倒れる時、俺そう呟いたな。

『私を使ってください』

使うつて言つたてどうやつてだ？

『武器を【想像】してください』

俺の思考まで読めるのか！？いや、それよりも言つ通りにしてみよう。

俺は剣を思い浮かべた。

『そのままその武器を握る感じに手を動かしてください』

言われた通り剣を握る感じに動かした。

すると、俺の手に光が現れた。

それがなくなつた後、剣が俺の手に握られていた。

『【想像】した武器はあなたの魔力を使って生み出します』
なるほど……俺の魔力を使って作り出した剣なのね。

『【想像】は無限大です。』

武器以外にも魔法、障壁などを【想像】するとそれも現れます
あの時呟いた【想像主】の意味がわかつたな。

ならこの剣で……。

「貴様……どこから剣を取り出した」

「へへ、秘密だ……俺はまだ死ぬわけにはいかねえ」
「ふん……行けウルフよ！」

「ガウツ！」

ウルフが俺に目掛けて走ってきた。

「ガアアアアアアア！」

ウルフは俺目掛けて襲いかかってきた。

「【想像】をすれば……」

俺は手を前に出して障壁を思い浮かべた。

すると、目の前には俺の魔力で作り出された障壁が出てきた。
ウルフは障壁によつて弾かれた。

俺はすぐさま障壁を解除してウルフに飛びかかった。

「オラア！」

剣をウルフの頭に思いつきり刺した。

「ギャウッ…………」

短い叫び声を上げてピクリと動かなくなつた。
「よし」

俺はウルフから剣を抜いた。

「やるな〜、なら俺が殺してやるよ」

そう言うと魔族は剣を構えた。

魔物だから勝てたもの……魔族に勝てるのか？

俺は不安を抱きながら剣を構えた。

「行くぜ！」

魔族は俺に襲いかかってきた。

「オラア！」

魔族は剣を振り下ろしてきた。

ガキイイイーン！

俺はそれを剣で防いだ。

「剣の腕だけでは、勝てないな……」

俺は魔力刃を思い浮かべた。

そして両手を上に挙げて、円を描いた。

すると、目の前に魔力刃が円を描いて現れた。

「喰らいやがれ！」

俺が手を前に出すと同時に魔力刃が飛んでいった。

あの時流れ込んできたやり方が出来るなら魔力での遠隔操作が出来るはず！

俺はそう思つた。

「当たらないぜ」

魔族はそれを避けていく。

よし、遠隔操作だ。

俺は意識を集中させた。

予想通り遠隔操作が出来た。

魔力刃がヒターンして魔族に襲いかかった。

「おい、後ろに気をつけな」

「あん？……なーー！」

魔族は驚いていた。

「遠隔操作だと！」

魔族はそう言つた。

そして魔力刃が魔族に刺さつた。

「がはつ！」

魔族は血を吐いた。

「ふん……まだ……だ」

まだ生きてるなんて……結構刺さつてるよ。

俺はどうするかを考えた。

するとマテリアルウェポンが話し掛けてきた

『あの者を捕まえてください』

何故？

『あなたの任意での者を【分解】する事が出来ます』

【分解】って何だ？

『つまり、あの者を魔力に【分解】するのです』

【分解】した後どうするんだ？

『【吸収】して自分の魔力にするか、もしくはあなたの想像するものに【再構築】して別のものに変えるかです』

なるほどね……なら。

俺は魔族に向かつて走り出した。

「死にに来たか！」

魔族は剣を振り下ろしてきた。

ガキイン！

俺はそれを剣で防ぎ、左手で魔族の頭を掴んだ。

「【分解】開始！」

俺がそう言つと魔族は暴れ出した。

「ぐわあーな、何だ！これはアアー！」

魔族の姿がドンドン足から消えていく。

「貴様ア！何をしたア！」

「俺はただあなたを魔力に【分解】しているだけだ」

「な、何だとオ！」

魔族はもう腰まで消えていた。

「お前は俺の糧となれ！」

「ぐわあああああああ！」

魔族の姿は消えた。

「【吸収】……」

俺がそう言つと粒子の様に飛んでいた光の球が俺の手の中に入つて
いった。

「【吸収】完】」

俺はそう言つとその場に座り込んだ。

「し……死ぬかと思つた

俺はそう言つた。

【分解】は物でも出来るのだろうか？

俺は試しに石を拾い上げた。

「【分解】開始」

すると、姿を消した。
物も出来る様だ。

「【再構築】」

俺は元の石を思い浮かべながら【再構築】させた。

そして【再構築】した石を投げ捨てた。

「思えばあのキューブは何処行つたんだ？」

俺は不思議に思つた。

その途端また頭に声が流れてきた。

『私はあなたの中にいます』

『はい？どういう事？

『つまり、あなたと融合したのです』

『え？……』。

俺はしばらく思考が止まつた。

「え？えええええええ！」

俺は思わず大声で叫んでしまつた。

だつて体に異常はないんだよ！

『つまりですね、あなたは私と融合した事により【想像】【分解】

【吸収】【再構築】の能力を得たのです』

な、なるほど。

俺は安堵の息を吐いた。

『だからこれからもよろしくお願ひします。

我が主よ』

「了解つと」

俺はそう言つた後、立ち上がつた。

「この遺跡を出るか

俺は出口を手指して歩き出した。

マテリアルウェポンの力（後書き）

感想・アドバイス待っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4303y/>

マテリアルウェポン

2011年11月17日19時07分発行